

三、瑞穂の波に萬樂を

ひびく麻名の水ゆたか

桑摘む子等の小唄聞く

東起点の川田駅

四、ここぞ名に負う紙漕場

銅掘る音のこだまして

いづれつきせぬ国の富

五分停車に降りる客

五、船戸トンネル東の間や

小川にかかる鉄橋に

高越山をば眺めつつ

ゆけば穴吹ステーション

六、永劫に住むてふ吉野川

北部に脇町のぞみみて

舞中島を過ぎ行けば

その名も優に小島駅

七、山紫に水清く

歌よむ人の集ふてふ

現世ながらの本樂寺

貞光駅はほど近し

八、祇園精舎の鐘の音に

参詣人の群多く

商店続く貞光町

煙草支局のあるところ

九、塗物の香のいや高く

半田駅をば後にして

川辺遙かに迫り行く

風情見あかぬ江口駅

十、豊葦かおる加茂駅を

過ぐれば三好郡立の

農学校の棟高く

迷はずもがな辻の駅

十一、汽笛は長うたそがれて

電燈まぶしく栄えゆく

専売局に名を得たる

ここ終点の池田駅

十二、深山にきこる杵人も

浜に漁とる舟人も

朝な夕なの往きかいに

笑顔あふるる聖世の今日

第二章 神社・仏閣

第一節 神社

西麻植八幡神社 はらまんじんしゃ



八幡神社拜殿

八幡神社は神社の中で全国でも一番多く、明治維新の時全国の神社の社格を決めるため、村社以上の神社を整理したが、全神社十一万余社の中、八幡神社は四万四百五社あったという。総本宮は宇佐八幡宮、宇佐神宮と称し、大分県宇佐市に鎮座している。

一、祭神

西麻植八幡神社の祭神その他については次の通りである。
氣長足姫命（神功皇后）
けいちあそひめのみこと

誉田別尊（応神天皇）
ほんだわけのみこと

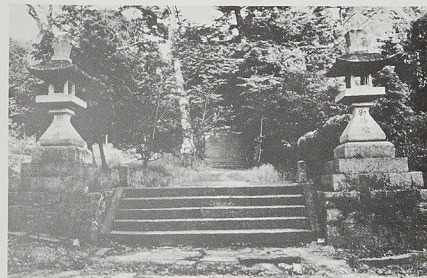
玉依姫命 (神武天皇の母君)

二、創建年月

創建ははっきりしないが、敷地の河辺八幡宮の氏子であった当地西麻植の人々が、正保(一六四四〜一六四八年)慶安(一六四八〜一六五二年)の頃、八月十五日の祭礼の際に行列の前後の順序を争って、現在の地に河辺八幡宮の分霊を受け、小祠を建て間もなく立派な社殿を建立したといわれている。現在の社殿は貞享三年(一六八六年)の棟札があるので今から約三〇〇年を越す古い建物であろう。

三、神官松本家の由緒

古記録によれば宝永元年(一七〇四年)頃には、その祠官松本大和守藤原重久は神祇官領長正三位侍従卜部朝臣より恒例の神官参勤の時は、風折烏帽子狩衣を着すべき者として、神道裁許の状を公布され、又祠官一家は慶安、明暦、貞享、元禄の年代にすでに従五位下を賜り、また祠官松本忌部連重序は光格天



八幡神社御神燈

皇より従五位下伊賀守の栄爵を授かっていたと記録されている。
四、境内の摂社

地神社、祇園社

中内神社

鴨島の延喜式内社

延喜式は、朝廷が康保四年七月(九六七年)諸国に頒分し、遍ねくこの式によらしめた、いわば、律令の施行細則規程である。これは禁中の儀式、百官臨時の作法、その他国々の恒式を詳細に記したもので、五十巻より成っている。

この中の「巻第九、巻第十、神祇神名」に諸国の神社の種類、祭神、座数等が規定してあるが、阿波国は五十座あり、その中、三座が大社で、四七座が小社である。これを一般に「式社」あるいは「式内社」といい、朝廷の尊崇極めて厚かった。

同書に次の如く掲げている。

麻植郡 八座 大一座
小七座

忌部神社 名神大、月次新嘗、或号
麻植神、或号天日鷲神

天村雲神伊自波夜比売神社二座

伊賀加志神社

天水沼間比古神「社」天水塞比売神社二座

秘羽目神足浜目門比売神社二座

これらの神社については、古来諸説があつて、いずれをそれと認め難いものが多いが、わが鴨島町内の式内社（小社）については牛島の杉尾神社に、天水沼間比古神（湧く水、湛える水を司る神）天水塞比売神（長雨を防ぎ止める神で共に水田の神と考えられる）の二座、西麻植の中内神社に秘羽目神、足浜目門比売神（この神共に不詳）の二座を祀つてあり、神社の祭神の上からはば確実



中内神社

のようで、栗田寛の神祇志料、大日本史神祇志、阿波志、永井精古の阿波国式社略考、岡本監輔「名神序頌」吉田東伍「大日本地名辞書」等諸説ほとんど一致して両社に比定している。式内社は由緒が古く、規模も大で、信仰する者も多かった。

右のように中内神社は由緒ある神社に諸説共比定しているから間違いないと思われる。

尚中内神社の夏祭は現在七月三十一日に行われているが、この祭の特長は雛形の祈禱と輪抜けである、雛形とは人形（ひとかた）に切った紙に一枚に一人ずつの生れた歳の干支例えば羊の歳の男とか巳の歳の女とかを一人に一枚ずつ書き込み、それを神官に御祈禱してもらい、その人の厄払いと、家内安全や豊作を祈つてもらうものである。

輪抜けとは大鳥居の中に藁で作った大きな輪をしぼりつけた中を通り抜けて参拝することであるが、この輪は何を意味しているか定説が無いが、丸い輪は太陽ではないであろうか、火の神太陽、万物を熱と光によって育んでくれる太陽、その中をくぐり抜けることによって身体を清め、病魔、を払い、厄を落す意味があるのであろう。

この二つの行事は近在でも珍らしく戦前までは郡内からたくさんの人が参拝に来ていたが、今でも遠い所から年寄等が孫の手を引いて参拝に来ているのである。

また戦前までは本殿の西側に高さ十メートル位のつぶの木があつて直径七、八ミリの黒い玉の固い実が熟れる頃は子供たちはその実を拾ったり、竹ざおでたたき落したりして遊んだものである。

笠松神社と山の神さん

笠松神社は三百年位前の創建と伝えられ、祭神には大山祇命をまつる山の神さんであるといわれている。

文化財としては鳥居の所に燈籠があるが、新田の故立石市太郎さんが川島町桑村のある神社にあつたものを手に入れて寄進したものだといわれている。それには明治五年六月の銘がある。本殿前の燈籠は弘化二年（一八四五年）八月二十五日佐野貞次良寄進の銘があるが、これは当時金貨をしていた佐野さんが、ある夜のこと夢枕に笠松神社の神様が現れて「貞次良よ今倉に盗人が入っているぞ」とのお告げがあつたので、急ぎ目をさまし倉へ行ってみると、蔵の中で盗人が品物をかき廻していた。大きな声で「盗人」と叫ぶと、盗人はあわてふためいて何も盗らず逃げて帰った、ということであつた。それで神様に感謝するためにこの燈籠を寄進したとのことである。

また神社の裏には池内武彦さんという神官の方が、明治中期頃まで住んでいたといわれている。

現在の本殿、拝殿は、地区出身で大阪在住の鴻野延太郎、鴻野沖三郎両氏の寄進によるもので、昭和七年旧正月に完成、その他の附属建築物は昭和九年までに完成したといわれている。

この神社は昔から靈驗あらたかだといわれている。大正の終わり頃、附近の子供が、夜中に急に齒が痛み出して、親が塩水をくぐませたり、梅干をかませたりしたが、どうしても痛みが止まらない。それで肩がこっているのではなにかと思ひ、笠松神社の前の山本というお婆さんの按摩さんの所へ連れて行き按摩をしてもら



笠 松 神 社

った。すると按摩さんが「おまはんや皆で昼、笠松さんでようけ遊んどったけど、こまい蟹に悪いことしとったんと違うで」といった。子供に問いつめると、子供は「蟹をつかまえて納屋の中へ入れてある」といったから、早速帰って見たところ、五、六匹の蟹を小さな箆で伏せてあった。生きていたのですねに笠松さんに連れて行って放した。するとびっくりするようにすぐに痛みが止まったとの話がある。その子供さんも今は六十過ぎであり、元気にしておられるのでほんどうの話である。

このように笠松さんは靈驗あらたかな神様として、附近の人々から信仰され、朝夕老人たちが賽銭袋を下げて、お参りに来る姿が見受けられる。

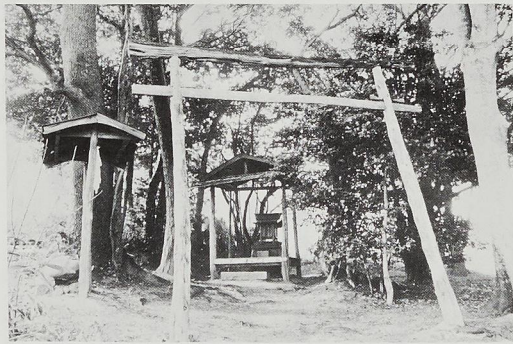
それでは祭神大山祇神とはどんな神様であろうか。

日本神話に出てくる神様であるが「古事記」には天孫ニギの尊が日向の高千穂の峰に天降りされた後、吾田の笠紗の岬で絶世の美人に出会ったので、「どなたの娘さんですか」と尋ねられると、「大山祇神の娘です」と答えられた。そこでニギの尊は「あなたに姉妹がありますか」と、また問われたので姫は「私には姉石長姫がいます」と答えられた。そこで尊は「結婚しませんか」と申されると「私からは申し上げられません、どうか父の大山祇神に聞いて下さい」と答えられた。大

山祇神はこの話を聞いて大いに喜び、姉のみにくい石長姫をそえ、多くの献上品と共に尊にさし上げた。しかし、みにくい石長姫を見て尊は「このお姉さんの方は結構です」といって送り返して、妹の木花咲耶姫だけと結婚された。

大山祇神は「娘二人をさし上げたのは石長姫に出来る子は暴風雨でも、地震でも、病気でもびくともしない、石のように強い子に、木花咲耶姫は木の花(桜)のように栄えるとの理由からだ、今ここに石長姫を返されたから、木花咲耶姫から生れた子は美しく華やかだけれど、その寿命は桜の花のようにはかないものになるだろう」と申された。天皇の御寿命が平均して短かいのはそのためであると記されている。

この神話は石長姫とは、永久に変らない山の巖のことを形容したものであろう。上古は山そのものが神の宿る所であり、山頂の岩は天の神が降臨する神聖な所でもあ



山の神さん

り、またその神が止まる所でもあり、また神そのものとして信仰された。

木花咲耶姫とは、華やかで美しい桜等の花や山の自然の美しさのこの形容であろう。

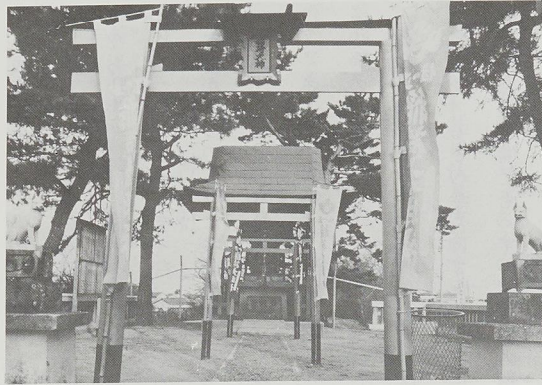
大山祇神とは神霊の宿る山そのものであり、山の精霊であり、又農作や人間生活に必要な水の根源の降雨を調節し、かつ、川の水源をも司る神である。一旦怒れば恐ろしい暴風雨によって大洪水をも引き起し、雨を降らさずに干害をももたらす荒神であると人々に恐れられ、また崇められていたその神の象徴であろう。

なおまたこの神社名がなぜ笠松神社と名づけられているのであろうか。それは神社の裏にある樹齢三百年になろうかと思われる大木が、傘のように張っているせいであろう。

また、この神社のほかにも、ここから二百メートルばかり東方の山裾にも一社、八幡神社の西北方二百メートル位の所の丘の上にも一社、山の神さんが祀られている。

稲荷神社

稲荷神社は吉野川遊園地（旧名江川遊園地）の中の江川堤防上に鎮座している。この神社は工藤



稲 荷 神 社

鷹助氏が昭和三年に江川遊園地を起こして、後昭和九年十一月、京都の伏見にある本社から分霊を受けて祀ったもので、人々から商売繁盛の神様として信仰されている。稲荷神社は神社本庁の統計では全国に三方二千社もあるといわれ、八幡神社について数の多い神社である。

辞書を引いて見ると広辞苑には「稲荷神社には倉稲魂神を祀つてある」と書かれ、また大日本神名辞書には「宇迦之御魂神」とあり字をうけとつかの読み方は「うけ」で一切の食物を司り給う意で、一説に大食津媛神（またの名を保食神）とも同神なりともいうとある。

神社名イナリ語源は何であらうか。稲荷、稲成、稲生の字の示す通り、稲の成育して熟すことで、古代の人は生物すべてに魂があり、その魂の作用によ

って成育すると信じたので、稲も実がなり、成生、荷（なりの当て字で一杯実った表現）も魂の作用であると信じ、その稲魂を信仰したからであるともいわれている。

なおついでに稲の語源をさぐってみると、南洋モルッカ諸島の最大の島ハルマヘラ島では米をイネといっているそうで、ちょうどその島は日本全土を洗う黒潮の源流の所である。そこから稲という言葉がその人々と共に黒潮にのって渡って来たと考えられないこともない。

なおイネとは日本語で稲が実って穂が下って寝た様な格好になるので、接頭語のイを頭にくっつけてイネと名づけたとも考えられる。また稲が命の根元である食物であると古代の人々が観じて、その命の根を簡略してイネと名づけたとも考えられるがどうであろう。

なおまた祭神の倉稲魂神のミタマは御魂ですが、ウカは前記のようにウケで食という意がある外に享で受けるとの意だけで無く、身に持つとかの意もあるので、すべての物を身に享けて持つている、即ち力を備えもっている食物の神ということでもあろうか。

それから稲荷さんの使者は狐ということになっているが、これはこの神を別名御食津神ともいわれるので、三狐神ともあて字して狐ということになったのであろうし、またこれも外の神様に神使があるように、この神にも狐をあてたのであろう。

また狐は人を化かすと信じられているので、商売人が人を化かしてでも、もうけることをはかることから、狐ということが考えられ、また稲荷さんが商売の神様にもなっていたのであろう。

なお稲荷神社本社は伏見にあるが、この神社は新羅からの帰化人である秦公伊侶具という人が、稲荷山の神籬を神木として祭祀したのであり、それを祀った和銅年間（七〇八―七一五年）にはすでにその一族は伏見方面を中心に七千五百三十三戸あったといわれている。

なおその初めての神祭りが二月七日の初午の日であったので、毎月午の日が祭日となり、特に二月の初午の日が毎年の大祭日と定められたとのことであり、鳥居の赤いのは稲の実った色を誇張したのであろうといわれている。

若宮神社

若宮神社については藩政時代のいつの頃かはつきりしないが、吉野の洪水の時に現在の社殿の附近に敷があつて、その敷に御神体が流れて来て引つかかったので、附近の人が小さな祠を作ってお祀りしていたが、明治十七年に大きな社殿に建てかえ、更に昭和二十七年に現在の社殿に作りかえ



若 宮 神 社

たのであるが、祭神等については不明とのことである。

その後いつの頃からかわらないが、御神体が誰かによって持ち出され、現在は徳島市の方でまつられていると伝えられているが、その神社名等についてもはっきりしない。

しかし不思議なことに、この神社の以前の祭礼日(旧の正月、五月、九月の各二十三日)の日には必ずその宵の午前二時頃に火の玉となって帰って来ていたといわれている。これは何十人もの人たちが確認しているそうであり、それは氏子たちが社殿で夜通しおこもりをしていて、午前二時頃が近づくと、「もう神様がお帰りになるぞ。」といって皆なで待っていると必ず火の玉となって帰ってこ

られたとのことであるが、現在はおこもりをしていないので、誰も見たことはないそうである。

またこの神社は靈驗あらたかな神様としても有名である。それは焼味噌さえしなければ、火災の時に絶対に類焼しないそうである。火災が大風の時に起つても、神社で御神樂をあげると、火焔は真上の方へ上がって隣家に火が移らないといわれ、現にこの附近で類焼は一回もしたことがない事実を見ても、不思議な話であるといえる。

なおまた現在でも、この神社の氏子の家では焼味噌をしない風習が、そのまま残っているそうであるが真偽のほどはわからない。

弁 天 社

弁天社は鴨島町粟島に鎮座していると思う人が一〇〇%だが、実は川島町の東北端に鎮座しているのである。

粟島の人たちが氏子としてこの社を信仰して管理、祭祀をしているが、元来は川島町の後藤田弥

三郎という人が広大な屋敷（この神社から西南方にわたり正方形の町道に囲まれた二〇〇平方メートル位の地域）を所有していて、ちょうど東北の鬼門に当るこの地に、小松島市金碓町の海岸に鎮座する弁天さんの分霊を受けて勧請したものであるそうだ。後藤田さんが事情があつて大阪へ移住するに当つて、粟島の人々が氏子となつて、お祀りすることを引継いだものであるという。文化財としては燈籠と手洗石がある。

燈籠 文政十二年（一八二九年）九月吉日

願主 当所 江本万右衛門

富岡町 藍屋 平吉

文政八年（一八二五年）九月吉日

願主 後藤田次三郎孝道



弁 天 さ ん

手洗石 天保十二年（一八四一年）九月吉日

願主 富岡町 藍屋 平吉

それでは祭神の弁天さんとはどんな神様であらうか。美しい女神で七福神の中の紅一点に数えられている。梵名をサラスパティイといい梵天（一名ブラマー）ともいい仏教以前の印度教の主神で天地創造の神といわれ、仏教が成立すると、いち早く仏法の守護神とされ、その数ある守護神の中でも最も高い神格の神として敬われた）の妃と称されたり、インドのサラスパティイという大河を神格化されたものともいい、水の神様として、土地豊饒の農業神として信仰されていた。後福智、弁財無尽の大慈を与え、又諸技を授けるような神様になつたといわれている。

我が国では市杵島媛と習合して、近江琵琶湖の竹生島、相模の江の島、安芸の厳島に祀られている。

この神を勧請した後藤田家は、当時吉野川が年々水害をもたらしていたので、その水害防除の願いをこめると共に、当時の農作物であつた藍等の豊作を祈つて、ここにお祀りしたのであらう。

第二節 仏 閣

廃寺十力寺

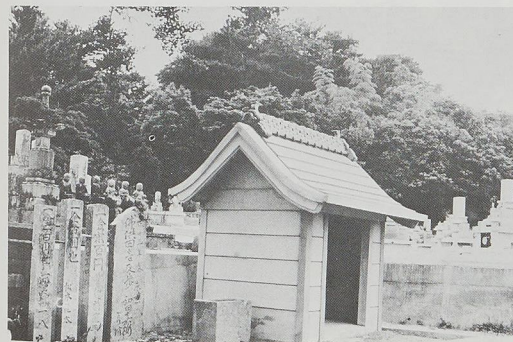
宗派 臨濟宗

寺号 龜泉山 十力寺

本尊 延命地藏菩薩

開基及び沿革

開基は不明であるが、始め東溪山東禪寺としようしていたが、天正年間に火災にあつて焼失し、元和八年（一六二二年）に再興した。過去帳によると中興開山は戒樹和尚である。この時は東禪寺と称しておったことが、明暦三年の棟付帳によつて知られる。十力寺に



十 力 寺 跡

歴代住職

戒樹和尚 — 祖璉和尚 — 義達和尚 — 祖応和尚 — 祖熊和尚 — 恵徳和尚 — (文化十三年
(一八一六年) — 嘉永六年 (一八五三年) まで無住) — 応海和尚 (明治) — 慈眼和尚 — トミ

工師

以上鴨島町誌に書いてあるが、右のほかに麻植郡誌では寛文十一年徳島市の興源寺の僧が再興したと記載されている。

旧寺院の跡地の墓地から、六地藏さんの横を通つて旧墓地へ登つて行くと、頭の丸い僧墓である無縫塔が十数基かたまりになつて並んでいる。これは代々この寺を守り、我々の先祖を吊つてくれた住職や、その家族の方たちの墓である。これらが一か所に集められたのは、昭和四十六年廃寺となつて後を引継いだ玉林寺の住職の小川月船師や檀家の人々が附近に散らばつていたのを、一か所に集められたものである。



法華石一字塔と六地藏

また寺跡に今残っているのは法華石一字塔と、東側ねり堀の地盤石であり、年を経たモチといちようの太木が遠方からでも見えて、ありし日の十力寺をしのばせてくれる。

六地藏さんは寛保二年（一七四二年）十一月に建立されたものであるが、その六地藏さんとは、輪廻転生する衆生を救済することから、六つの分身を考えて六地藏として信仰されたもので、平安末期から始まったといわれている。

六地藏さんの東側に並んで法華石一字塔が建っているが、これは寛政八年（一七九六年）三月の建立になり一石に一字づつ法華經を書写し埋めて祈願や供養の目的を達するために建立されたものである。ここのは宝篋印塔方式の立派なものである。

この寺は禅宗であった関係か、東禅寺墓地に五輪塔は少ないが、二、三墓地の茂みの中に見えるようである。

なおこの寺には山を借景に取り入れた立派な庭園があった。その庭石は現在西麻植小学校の庭園石として、場所を変ったがそのまま生き続けている。

四国霊場第十一番藤井寺



藤井寺

四国八十八か所の第十一番藤井寺は札所であるので、檀家が少く百軒余りしかない、これも昭和の十年頃に西麻植の十力寺の檀家の七十軒余りが、故あって藤井寺の檀家としてお世話になるようになったために増えたのである。それまでは三軒位であったそうなので、寺の位置は違うが西麻植の寺といっても過言ではないと思われる。

この寺は禅宗の寺で寺名は金剛山藤井寺といい、臨済宗妙心寺派で、山主は福留洋宗氏であり、巡礼歌は次の通りである。

色も香も無比中道の藤井寺

真如の波のたたぬ日も無し

寺の縁起によれば弘仁年中（八一〇―八二四年）弘法大師四十二才の時附近の農家に來てみると、家族が高熱で苦しみ、また附近の人もみな熱病にかかり苦しんでいたので、薬師如来を刻み祈りをささげると、病人は全部平癒したので一寺を建立し、その薬師如来をまつたのがこの寺であるといわれている。実はこの本尊も仏師経尋が久安四年（一一四八年）釈迦如来像として作られたことが、像内背部に墨書銘文があり、これによって釈迦如来像として刻まれ、後に薬壺をそえて、薬師如来像として改装されたものであることがわかる。この像は銘文のある像としては四国最古の貴重なもので、国宝として国の重要文化財に指定され、現在は本堂の後にある収納庫に収められている。その愛情に満ちた温顔には独りてに誰でも手を合わせたくなって来るのである。本堂にある薬師如来像は、奈良の信者の手によって寄進された写し本尊（本尊と同じ型に作った像）である。

高野山の僧寂本が約三百年前に四国巡拝をした時に、藤井寺に関しては「此の寺大師の啓迪なり、本尊薬師如来大師作、寺前鐘樓、傍に地藏堂、鎮守祠あり、下に仁王門を構えたり、今は禅者棲息せり、是は依て今の堂其の宗の風に作れり、岸溪水清し、延濑として岩間段々落つる所、白藤の棚等も見えきとぞ、堂前古藤あり、寺の名は問はねど知りぬべし」とある。

寺は元は現在地でなく谷の東側の広い駐車場の上側にあったのであるが、天正年間に兵火にかか

り、またその後天保二年（一八三一年）にも焼失したが、延宝年間（一六七三―一六八一年）に徳島の慈光寺の南山禅師によって再興されたといわれている。また屋根には瓦師として日本三名工の一人といわれている敷地に住んでいた河津沢太郎の唐獅子が、にらみをきかして堂宇を守っている。

本堂の須弥壇（仏さんをお祀りしてある台）は岩手県の中尊寺の金色堂のものと同じで、その貝を塗り込んだ漆塗は三十数回も重ねたもので、見れば見るほど幽玄な境地にひたることができる。

天井一杯に書かれた豪快な龍の絵は、町内森山出身の画家林雲溪さんと、その門下生によって書かれたもので、鳴き竜としても有名である。

山内には写し霊場（霊場と同じものの意であるがミニ霊場ともいわれる）四国八十八ヶ所と西国三十三番があつて、信仰と散策の場所であり、近隣の人のお参りも多い。

なおこの寺の本尊である薬師如来とはどんな仏様であろうか。それは密教の仏であつて読んで字の如く人々の心と体の病を癒し、そして寿命をも延してくれらることを本願とする仏さんである。

春と秋の中日さんは切幡寺と決っていたが、最近はこの寺が切幡寺と参詣者を二分するようになり、中日さんには市が立ち、県下から遠路マイカーを利用して来る人や近所の人でこったがえし、その数は数方といわれている。

玉林寺

禅宗寺院で臨済宗妙心寺派である。寺号は慈眼山玉林寺。本尊は千手観音である。



玉林寺

縁起によると文治二年（一一八六年）平康頼が源頼朝の命により、阿波国の麻植保司に任せられ、政庁を今の森藤一町地に建て、この辺一帯を治めていた。翌文治三年（一一八七年）後白河法皇から賜わった閻浮檀金の一寸八分（約六センチ）の千手観音を本尊として、今の堂床の地に、慈眼山玉林寺を建立せられたのである。又慈眼山から少し離れた地に鬼界山補陀洛寺をも建立して、康頼は二ヶ寺を兼務したのである。この時また三谷の奥西方六坊には有徳の僧六名を置いて、上は後白河法皇から下は亡母、俊寛及び治承、養和の亡人の冥福を祈ったとある。

阿波誌には天正年中に兵火にあつて、合せて一山にし、

一、二の子院もあったが皆廃絶したとある。慶長年中亮長老と祖越が共に堂宇を再建して曹洞宗としたが、また荒廃し、延宝年間にその弟子宗本が現地に中興開山して臨済宗となった。阿波西国第三十番の観音札所である。

なおこの寺には町指定の文化財で室町時代頃のものとされる釈迦十六善神像が保存されている。住職は現在小川月船師で第十二代目である。

この寺は西麻植の十力寺が廃寺になった時、その寺の檀家の大部分がこの寺に移りお世話になっている。

報恩寺

真言宗御室派の寺院で愛染明王を本尊としてまつられている。飯尾にあるが、西麻植に真言宗の寺院がなかったため、西麻植地区の檀家が多い。

開基及び沿革は「元東山村樋山路に有り、縁起によると弘仁年中弘法大師四国御巡錫の時に、迷い児をすくい、その子供のために愛情の守仏である愛染明王を刻まれた。後子供は立派に成長して大

師の恩に報いるため一宇を建立したことに始まる」といわれ、また一説によると火山寺がそれで、のちになって通称から報恩寺となったといわれている。

報恩寺には元亨元年（一二二一年）の板碑が発掘されており、この板碑が以前報恩寺のものであると、鎌倉時代にはすでに本寺が存在していたことになる。

美馬郡白人神社所蔵の大般若経に「応永二十七年（一四二一年）庚午十一月阿波、麻植越地天徳山報恩寺常住」と表記せられている（燈火録）。又天正十七年（一五九〇年）には藩主蜂須賀氏から寺領をもらった古文書の写真が川島町山田の河野通衛氏宅にある。慶長年間に僧憲明この地に中興開山する。藍作の盛んな時には藍が愛染の愛と発音が同じなので大変な信仰をもたれたという。

阿波西国第二十九番の観音札所である。



報 恩 寺

持 福 寺

真言宗御室派の寺院で飯尾にあるが、西麻植地区に真言宗寺院がなかったため、この寺の檀家が多い。

本尊は阿弥陀如来であり、縁起には

「当山は元名西郡阿野村阿川にあり、弘法大師焼山寺御開山の際、信心深き老人夫婦のために阿弥陀如来の尊像を刻み供養せられし云々」

とある。

天正年間の火災のために堂宇焼失し、其の後慶長年間に至って、京都大覚寺の直末寺院として、僧晴雲がこの地に再興した。

第三章 遺跡・古墳・記念物

歴代住職は現住尊雄師さんゆうで十九代目である。



持 福 寺

第一節 遺跡・古墳

地区の主要文化財

各々の詳説のところでくわしく説明してあるので、ここではその名称だけを記して参考としたい。

一、八幡神社

- 1、陶製狛犬（町文化財に指定）
- 2、太鼓橋（町文化財に指定）
鳴き狛犬（町文化財に指定）
- 3、両部鳥居（町文化財に指定）と大鳥居
- 4、砂岩製狛犬と青銅製狛犬
- 5、大燈籠
- 6、拝殿と本殿
- 7、モミの太木

- 二、中内神社
- 三、東禪寺遺跡と出土品
- 四、忌部古墳と出土品
- 五、江川の水温異状現象（徳島県天然記念物に指定）
- 六、十力寺跡の六地藏と法華石一字塔
- 七、笠松神社と燈籠

東禪寺遺跡

一、位置

東禪寺遺跡は西麻植壇ノ原十八番地の二にあり、旧十力寺跡から東南方百メートル足らずの河野友吉さん宅の南側の平島桃作さん所有の農地の下に埋っています。

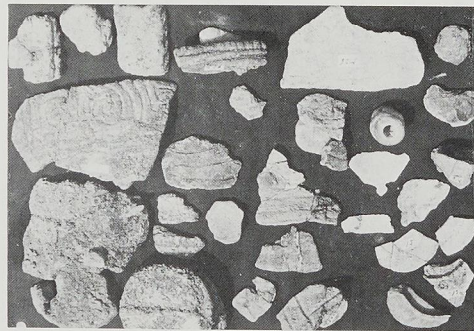
二、発見のいきさつ

土地所有者の平島桃作さんが、昭和四十二年に開田作業をしていて沢山の土器片を見つけたの

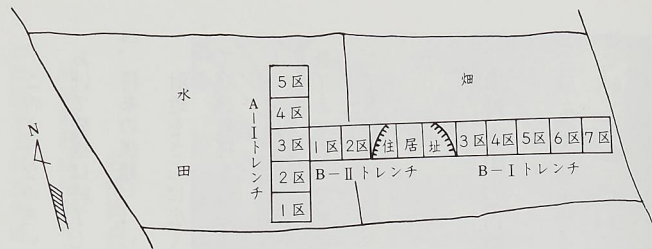
で、桃作さん自身もこれに興味をもっていき、又同じ西麻植療養所に務めている郷土史の研究家である青木幾男氏にも見せて互に協力して研究を重ねたところ、縄文土器であるのに気がつき、ここが県内でも数える程しかない縄文時代の遺跡であると推定し、二人は更に小規模の発掘をしたところ、多くの遺物が発見された。

縄文式土器、弥生式土器、須恵器等が見つかったことによつて、かなりの長時間にわたる遺跡であると判断されたのである。

しかしこの遺跡が古代の住居跡か、あるいは他から流れて来たりしたものではないかといった遺跡の性格がはっきりしなかつたので、本格的調査を必要としたから平島、青木両氏を中心として関係者の間にその要望が高まり、町当局にも働きかけを続けた結果、昭和四十六年度の事業として、遂にそれが実現することになり、町は徳島考古学グル



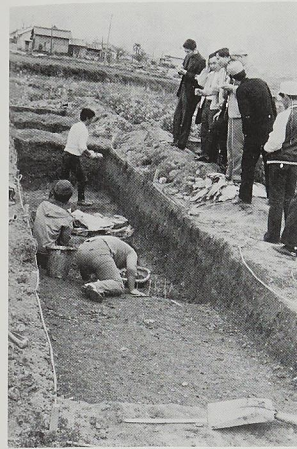
東禪寺遺跡出土品



この焼けた住居跡は直径七メートルの円形と推定され、柱穴も二本発見された。さらにこの住居跡からは土器片三片と石鏃二個が出土したが、土器片の内一個は磨消縄文を施してあるが、この磨消縄文は今から四千年位前の縄文時代後期に多く見られる文様で、土器の表面に先づ縄目の文様をつけ沈線で区画すると区画の外には最初につけた縄文が残るが、これが即ち磨消縄文である。石鏃は矢の先につけた刃のことであるが、これははっきりした時期はわからない。

A-I-IIIでは土器片と磨石が出土した。この磨石とは石皿の上で物をすりつぶす時に使うもので、表面はよく研磨されている。凹石(くぼみいし)は木の実等をすりつぶしたりする時に使われるもので、丸い平たい石の中央が凹んでいて砂岩でできている。

その他縄文式、弥生式土器片がダンボール箱に二箱も出土した、またこの外に新しい時代の土師器(ハジキ) 須恵器(スエキ) 瓦器(カキ)等の土器片も出土したのである。



遺跡発掘調査

発掘調査はトレンチ法(発掘調査で主として部分発掘によって遺跡の概観を把握するためにする方法)によって左図のように行われ、途中水が湧き出る等のこともあったが順調に実施された。先ずトレンチ設定の場所を決めほぼ南北の方向に長さ十メートル中二メートルのA-I トレンチ、つづいてそれと直角にB-I トレンチ(十四メートル×二メートル) B-II トレンチ(六メートル×二メートル)を設定し、このトレンチ内を発掘してゆき、三月三十一日には住居跡を発見するに至り、さらにこの住居跡が火事跡であることがわかったのである。真赤に焼けた床の土や、焼けこげた柱や、屋根を葺いたカヤ等が次々と発見されたことから判断されたのである。

ープに依頼して学術調査として実施することになり、昭和四十七年三月二十五日より四月九日までの十六日間にかけて発掘調査が行われた。

三、発掘調査の要領

このようないろいろな時代の土器、石器、住居跡等の発見という考古学的に価値のある成果をあげて発掘は終了したが、遺跡保存のために再び原状に埋め戻したのである。

四、将来の課題

附近をさらに広く発掘すれば多くの石器、土器類が出るであらうし、又集落の有無もわかるのでぜひ発掘したいものであるが、ともあれ四千年前に我々の先祖たちが土器や石器を使って新しい文化生活を求めて精一杯生きるための努力をしていたということがわかったことは偉大な成果であった、と共に将来の完掘によって、どんなものが発見されるかという希望と夢をもつことができたことは我々にとって大いなる喜びである。

東禅寺山の古墳と副葬品

古墳が西麻植東禅寺山に十数個群をなしありしを、近年全部開拓されて形跡を失なう。開拓の際鏡、剣、管玉、勾玉、鉄器、土器、矛、斧、銀環等を多数発掘し、鏡、土器等完全なものは東京帝國博物館に蔵されている。鉄器、土器の破片は発掘者西麻植村笠井儀一氏が蔵している。



古墳発掘跡

昭和三十七年三月調査したところ、現在の東禅寺山はほとんど墓地となり残余は開墾されて畑地と化し、わずかに東、南の山頂に一か所大きな円墳と考えられる発掘跡が存在し、石棺の一部が露出している。

土地の古老に聞くと、明治の末期までここに「忌部さん」と称する小祠があり「忌部の角さん」という堂守がいて、土地の人々がときどき参詣していたとのことであるが現在は古墳の発掘穴だけが残っている。

山頂古墳の石棺から出た勾玉及び銀環は飯尾の野田誠作氏が現在も所蔵しているそうである。

石槨掘出候儀に付上申

麻植郡西麻植村士族笠井与三郎所有地ニオイテ本月二十八日石槨掘出該人ヨリ御届仕候處、猶詳細取調申出候様御達ニ付、左ニ廉書ヲ以、別紙図面相副此段上申候也。

明治十四年三月三十日

徳島県阿波麻植郡長 曾我部道夫殿

一、石槨 壺

但し元山林之處客年開拓ノ場処ニテ地面ヨリ三尺下り底部槨中骸骨全体ノミニテ器物等更ニ無シ、尤石槨両側及蓋石裏面トモ朱色アリト雖モ朱粉ハ無シ、然シ爪杯ヲ以蓋石ノ朱色ヲ削リミルニ些少朱粉ノ如キモノアリシ趣。

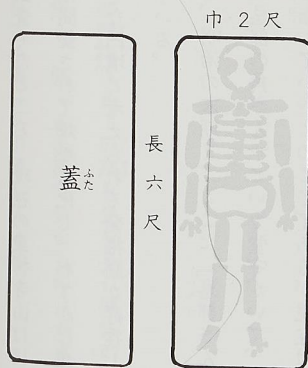
一、丸鏡 但シ裏ニ持手アリ 壺面

是ハ右石槨埋処ヨリ二間南ニ距リ地面ヨリ三尺程底ヨリ掘出候。

一、鎧鎗刀 壺本

是ハ丸鏡同処ヨリ掘出ス、尤ニツニ折刀形不分明之趣。

右二品ハ二十八日該処ヘ川島警察署ヨリ巡査出張、



一応参考ノ為持歸、追テ下戻候旨地主ヘ申聞相成候趣。

一、石槨処置ノ儀ハ二十八日該処ヘ川島警察署巡査出張元ノ如ク埋置候様地主ヘ申聞引取候趣。但シ川島警察署ヘ届書ノ儀ハ昨二十九日一応指上処却下ニ相成本日別紙ノ通改書シ届出候事。

以下略

西麻植城跡

阿波誌には「西麻植壘在西麻植村、工藤甲斐守別壘」とあり、戦後まで残っていたが、現在は西麻植教育集会所の敷地になっているが、むろん壘といつても、ただの土堀程度の屋敷と思われるが、この壘も、また天正十年の長曾我部の攻略にあつて落ちたが、城跡には小祠があつて甲斐守の靈を祀つてある。甲斐守の嫡子に左衛門祐清があり、蜂須賀に仕えて五十石を領し、この地に居住したと伝えられており、その後裔を名乗る家はこの附近に分れ住んでいる。

壇ノ原

従来、阿波国における軍団の所在地は、今の国府町延命の鮎喰川沿岸に、ダンの原と称する所があつて、ここがその所在地である。と考えられ、その理由は、現在地名のダンの原は、古えの団の原、すなわち軍の練兵場であつたところであるといわれている。

阿波国の軍団数、並びに兵士の人数などは、記録がないのでわからないが、記録が残っている他国の例をみると、筑前国は四団四千人、筑後国は三団三千人、豊前国は二団二千人、豊後国は二団一千六百人、肥前国は三団で二千五百人、日向国は一団で五百人となっている。ことに「出雲風土記」の終りのところを見ると、「意宇軍団は即ち郡家に属せり、熊谷の軍団は飯石郡家の東北二十九里一百八十歩なり、神門軍団は郡家の正東七里なり」とあるから、その国の軍団が一箇所にのみ置かれたものではなく、出雲国の例から類推すると、凡そ四郡に一軍団の割合で配置されていたことが察せられ、治安維持法の任務の上からしても、何箇所かに置かれたものであらうと思われる。殊に彼等は地方の軍団に入つても、武器はもとより、食糧までも自弁であるから、これができない貧民の子弟は労働をもつて償わなければならない。従つて訓練の場所の如きも、交通不便の時代

には国府の所在地のみではなくて、適当に何か所かで行われたものではないかと考えられる。

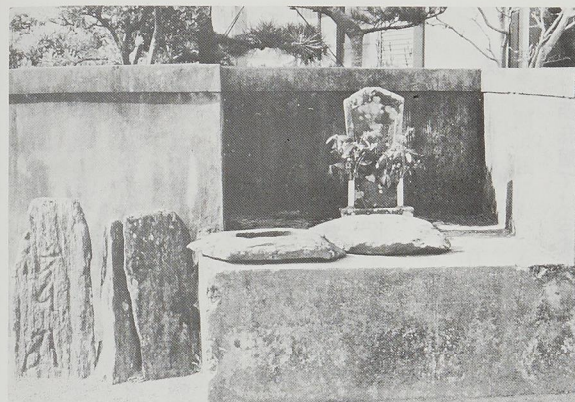
この「壇ノ原」は低い丘陵上に、つくられた平地で、東西約八十米、南北約百米に及ぶ原野の公有地である。その南より唯一本「忌部松」と村人達が称している樹齢数百年の松の大樹が天空に枝を張つて永年の緑を保っていたが、昭和五十六年松喰虫の被害にあつて伐られてしまった。

往古よりこの地方では、ここで武術の鍛錬などが行われていたのはあるまいか。殊に藩政時代から明治初期にかけて、ここで武術の競技が行われていたことは郷土の古老が語りつたところである。

当時の阿波国軍団が一箇所だけでなかったとすれば、この「壇の原」はいわゆる「団ノ原」で軍団の所在地ではなかったか、検討してみるべきであらう。

板碑

板碑は西麻植では三基だけ見つかっている。田渕の木戸治郎さん宅の裏の四差路の北側に一基と、中筋の小倉富夫さん宅の裏の辻に二基、合計三基が現存しているようである。



小倉富夫氏宅裏の板碑（左の二基）

板碑は死者供養のために建立されたものであるが、人形起源とか塔婆起源とか五輪塔起源等諸説があるがいずれも定かではない。

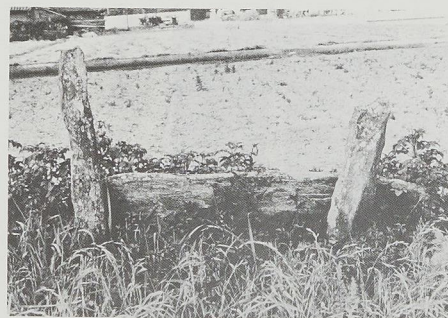
この板碑は鎌倉時代に発生したもので幕府の御家人が守護、地頭として全国に赴任した時に、その土地の石によって作ったといわれている。

阿波では近世まで数多く作られているが、阿波特産の緑泥片岩（青石のこと）が大部分である。

この石は質がやわらかく刻字が容易なため使われているが風雨に弱いため、表面がはがれやすくなると刻字も消えやすく、西麻植にあるものも三基共建立年月日が不明である。

馬 繫 石

田淵にある元河野当五郎さん宅の屋敷跡に馬繫石が三本立っている。十センチ角位の青石で荒仕上であるが、一本は一米ートル二〇センチ位、一本は八〇センチ位、一本は五十センチ位であるが、短かいのは上の部分が折れたのであろうか。昔は小さい家の人は馬を飼う家も少なかったし、もし飼っていても木にでも何にでも繫いだだが、大家はたいい馬を飼っていたが、その馬を繫ぐためや来訪者が馬に乗って来た場合その馬を繫ぐために繫ぎ石を備えていたそうであるが、ここには今も屋敷跡の農地の中に珍らしく残っていて、その石をながめていると、昔のことがしのばれて、なつかしく、また何かわびしい気持ちにもなってくる。



馬 繫 石

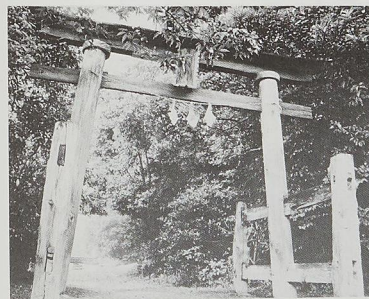
第二節 記念物

八幡神社の文化財

西麻植は吉野川の遊水地であつた關係で他地区に比較して文化財は多いとはいえないが、八幡神社に珍らしい両部鳥居や、陶製狛犬等があるので紹介してみよう。

一、県下で一つしかないといわれる両部鳥居

一名四脚鳥居、袖鳥居、杵指鳥居ともいわれ、明神鳥居（一般に神社に使われている鳥居）の柱の前後四隅に控え柱を設け、本柱と控え柱との間に上下二本の控えぬきをつけたもので、本地垂迹、両部権現説（簡単にいえば神も仏も同じという思想）によって、神仏混淆の神社に多く建て



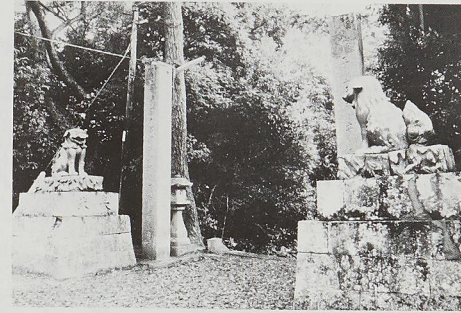
両部鳥居

られているが、関西でも数少なく安芸の厳島の海の中にある赤い鳥居がよく知られ、県下ではここ一か所しかない珍しいものであり、河野一族によって寄進されたと伝えられている。材料はネズの木で、一般にムロの木ともいわれているが、木が固く、風雨に強く、昔から警鐘台等によく使われている。棟札の字が風雨にさらされて消えているから建立年月日はわからないが神仏分離政策が行われた、明治元年以前に建てられたものと思われる。（昭和五十七年町文化財指定）

二、陶製の鳴き狛犬と太鼓橋

昔から有名であり、新聞紙上を賑わしたりラジオでも放送された、この鳴き狛犬と太鼓橋の組み合わせは昔からの名物で、大正の頃までは子供達は毎日のように、ここで遊んで鳴かしたものである。太鼓橋の上を下駄等で踏んでカンカンと音をたてると、石段の上の陶製狛犬がキャンキャンと鳴くことは事実であるが、これは地形と反響をうまく利用した昔の人の英知によるものである。

陶製狛犬は小さいものは県下でも数か所にあるが、大きいのはこのものだけである。四国でも四か所にしかない珍しいもので、伊予の石鎚神社に二対、讃岐の金比羅神社に一对と、同じ讃岐の国分寺町の春日神社に一对あるだけである。

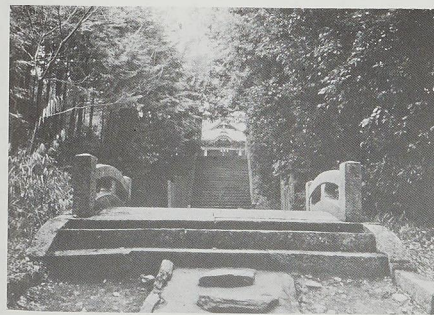


陶製狛犬一對

金比羅神社や石鎚神社は全国的に尊崇を受けている神社なので、その神社と肩をならべて、同じ貴重なものであるということは誇りとしてもよいと思われる。

ここのは他の三か所と同じように備前焼である。他は皆無銘であるが、ここは

備前焼の本元伊部の名工森嘉太郎中節が精魂こめて焼いたもので高さ八十三センチと八十五センチの大きなもの



太鼓橋

である。台石には天保五年（一八三四年）八月二十九日建立と刻字してあるので、同年かその前の年に焼かれたものである。なお台石には大阪の人々の寄進者と世話人の名が記名されているから、西麻植出身の大阪の成功者が寄進

したものである。なおこの陶製狛犬は昭和五十六年町文化財に指定されている。

太鼓橋はそのそり具合は県下一ともいわれているが、天明三年（一七八三年）願主多田門吾重利、多田永之助重正の名が刻まれている。この多田氏の系統は兵庫県の多田村から織田信長との戦いに敗れて、こちらに移住したといわれ、現在も町内に居住している。（昭和五十七年町文化財指定）

三、モミの木

両部鳥居の両側にある二本一対で、樹周二メートル四〇、樹高三十三メートル、樹齢約二百年になんなんとするといわれ、県下でも数少ないものである。

四、五本松

神社東側の忠魂碑の南側にあったが、惜しくも昭和五十六年秋松喰虫のため枯死寸前であつたので切り倒された。

地上一メートルの所で、五本に分岐した丸い美しい樹冠は遠くより傘のように眺められた。地上一メートルの所で樹周六メートルもあり、樹高三十一メートル、推定樹令四百年を越すといわれていたが、誠に惜しい樹をなくしたものである。

五、石製狛犬

狛犬は高麗犬とも書き、西アジア方面から朝鮮を通じて伝わって来た。神社の守護と、装飾の意味を兼ねて置かれた獅子を表したものであるといわれている。

ここには町文化財の陶製のものと、外に青銅製のものと、石製のものと三対あるが、石製のものは砂岩製で嘉永六年（一八五二年）八月吉日麻植安之平の寄進銘がある。

青銅製のものは、拝殿と本殿の中間にあり、大正十三年十月、東京在住の西麻植出身の和田嘉衡氏の寄進であり、大阪瓦町四、高尾謹製の銘がある。

六、大鳥居（馬場の北端）

鳥居の起源については、はっきりしないが、昔は山や森に神が宿り、又神が天から降臨する所として崇めたが、その入口にお供物の鳥をいけにえにして供えたので、鳥居というともいわれ、またビルマ国やタイ国に住むアカ族は部落の入口に八本の柱を立て、上に笠木を渡した門を構えているが、その笠木の上には竹や木で組合せた鳥を乗せている、これは大空を自由に飛ぶ鳥が神の使いである信じ、それにあやかるように、鳥をお祀りして、農作物の豊穰や、悪霊、悪疫の退散を願ったのであろう。そしてその人たちが日本に移住して来た時の、その風俗、習慣を継続

しているのではないかといわれている。なおこんな鳥居を明神鳥居といい、また鳥居や屋敷の入口に飾るメ縄は天候を司る神である竜神の形に作られて、農作物の豊作を祈るものであるといわれている。

七、大燈籠

石段下と拝殿正面に一對ずつあり、

ともに古く、石段下正面のものは文政五年（一八二〇年）願主新田與右衛門の銘があり、拝殿正面のものは文化九年（一八一二年）河野清太夫釈善良の銘がある。

八、拝殿

この建築様式は権現造の様式であ

り、貞享三年（一六八六年）の棟札があるので、約三百年を越す古い建物である。



大 燈 籠

十力寺跡の文化財

十力寺も長い歴史の幕を閉じて昭和四十六年ついに廃寺の止むなきに至って、西麻植地区としては寺院が無くなり、その跡に五十七年六月記念碑と小さなお堂が建てられ、また旧山門の両側にはモチとイチヨウの太木がありし日の姿を想い出させてくれている。

一、無縫塔

六地藏の横の細い道を通って山の墓地へ入って行くと頭の丸い僧墓である無縫塔が十数基一固まりになって並んでいるが、これはこの寺を代々守って来た坊さん達の墓地である。

この墓は十力寺が廃寺になった時に墓地の中に散在していた僧墓を、一か所に集めたものである。この無縫塔とは頭が卵子型の丸い墓のことで、元は禅宗と共に日本に入ってから、禅宗の僧専門の墓であったが、今は各宗派共通の僧墓として使用されているようである。

二、宝篋印塔式法華石一字塔

イチヨウの木のお手に寛政八年（一七九六年）五月建立の宝篋印塔が一基高く建っている。この塔は唐のあの孫悟空で有名な三蔵法師が書いた「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」の

教えの中から出た名称であるといわれ、同経の説くところによると、「

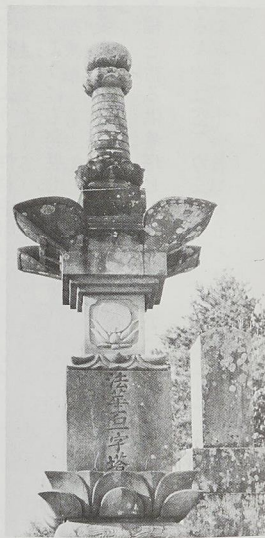
人若し此の經を書写して塔中に置かば、この塔は一切如来の金剛蔵の卒

塔婆とならん」とあり、そしてこの塔に一香一華を供え礼拝供養すれば、

八十億劫生死重罪が一時に消滅し、生きて

いる間は災害から免れ、死後は必ず極楽に生れかわる

といった功德があると書かれていて、この信仰によって鎌倉時代以後に一般に普及されたものである。



法華石一字塔

なおこの塔には法華石一字塔と彫り込まれているが、これは法華經を一石に一字づつ書写して塔中に納め、先祖供養や家族の来世の安穩を祈願したもので、塔の方式は宝篋印塔であり、内容は法華經を納めたもので、両方の願いを重ねて祈願するように作られたものである。

またこの宝篋印塔方式の塔は墓にもその形態が取り入れられ、ここの十力寺跡の墓地や、山上の墓地にも沢山作られている。

三、五輪塔

この山手の墓地の中に、二、三基の五輪塔（五つの変った形の石を積みあげた塔墓）があるが、これは一口にいつて元来は拝み墓で、遺骨が入っていないのが原則であるが、遺骨が入っている普通の墓と同じようなものも多く近代のは大部分が遺骨の入った墓として使用している。

この五輪の意味は宇宙は地、水、火、風、空の五つの元素から形成されているという仏教特に真言宗の影響によるものであり、この塔は日本にのみ発達したものであつてこの源流説には、いろいろの説があるが、印度の卒塔婆が日本で立体化したものであろうというのが通説である。

ソトバとは梵語でスツウバア。ビルマ語でバゴダである。古来印度で土饅頭型に盛り上げた墓のことをいい、それが次第に変化して記念物のような性格を帯びるようになり、そしてまた仏舍利を奉納する形を取り、三重塔、五重塔のようにも発展し、また一方では死者追善のために、細長い板に五輪塔の形に切り込みをつけた塔婆を墓に立てる習慣ができた。しかし日本では、それが大日如来を本尊とすると共に、死者の冥福を祈る供養塔として発展したことは、確かなことといわれている。それは大日如来の真言であるキャ（空）力（風）ラ（火）バ（水）ア（地）が刻まれていることからいえるのであろう。

四、六地藏

法華石一字塔のそばに寛保二年（一七四二年）十一月に建立された、苔むした六地藏が静かに風雨に打たれながら坐つてござる。

地藏さんが六道（衆生がそれぞれの業によつて趣き住む所を六種に分けていう、即ち地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道）を輪廻転生する衆生を救済するという、仏教上の思想から六つの分身を考えて六地藏として信仰することが、平安末期頃から始まったといわれるが、その六地藏とは

金剛願地藏……地獄道の救済

（極悪人が地獄に落ちたのを救済）

金剛宝地藏……餓鬼道の救済

（非常に悪い事をして餓鬼道に落ちた者を救済）



六 地 蔵

金剛悲地蔵……畜生道の救済（悪い事をして畜生道に落ちた者の救済）

金剛幢地蔵……阿修羅道の救済（悪神からの救済）

放光王地蔵……人間界の救済

予天賀地蔵……天人界の救済

右のような我々を助けてくれる仏さんとして祀られているのである。

蟹 泉

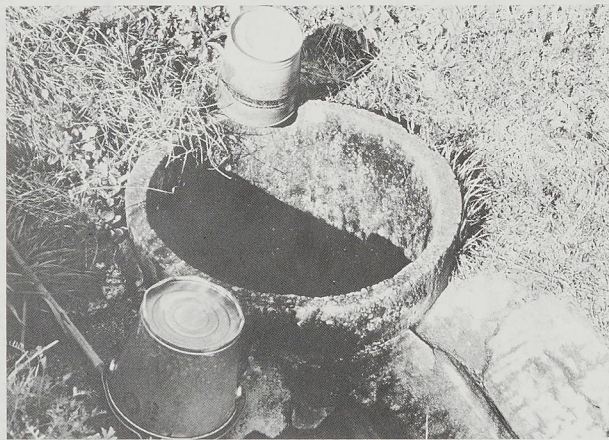
廃寺十カ寺跡から東南二十メートル位の所に、常に水が滾々と湧き出ている泉があるが、まことに不思議な泉である。西方に高さ二十メートル位の台地があるだけで、しかもその台地は墓地で樹木もあまり生えておらず、地下水の集まる谷の線でも無いのに、どうして年中休みなく水が湧き出るのであるうか。

その理由はともかくとして、この泉にそって東南方の平島桃作さん所有の畑に、縄文遺跡が発見されているが、この泉も恐らく遺跡の年代の四千年も前の時代以前から湧き出ている、当時の人々

が、ここに泉があつたから住みついでこれを利用するようになったのであらうと思われる。

古くから利用されていたと思われるのは、西行法師が行脚して来られ、この泉の水を飲まれた時に蟹が居つたので蟹泉と名づけ、また和歌を作ったといい伝えられているが、その歌は今は忘れられて残っていない。

昔は下の田の八畝位も養うだけの水量が有つたそうであるが、住民が池にして、もう少し多くの水をたくわえて、広く水田を養なおうとしたので、水神さんが怒って水量を少なくしたともいい伝えられ



蟹 泉

ている。大正の頃までは蟹やいもりがいて、真赤な腹を見せて泳いでいたが、今はその姿も無く淋しい気がするが、水は相変らず休みなく湧き出ている。
又この蟹泉は藩政時代、村々から藩の方へいろいろな珍らしい事を報告した「村邑見聞言上記」という本にのっている。

江川の異状水温について

現在、県西きつての子供の樂園として知られている吉野川遊園地、鴨島町西麻植の江川湧水池は、全国的に水温異状現象が顕著な所として有名であり、県の天然記念物に指定されている。

この奇現象をもつ江川はもと吉野川の本流であつて、明治二十年頃の大洪水にはこの附近一帯が深淵となり、舟の通る水路になつていたようである。ところが南岸の人々には吉野川の南遷が洪水の氾濫を多くすることを恐れ、江川の西方の淵を埋めて本流を北にかえ、その後吉野川の改修工事による堤防が現在の如くできたため、江川を分離して湧水を見るに至つたものである。

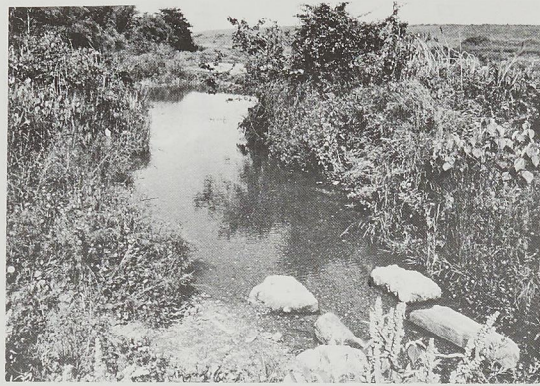
一般の地下水や井戸水は年間を通じて大体十五度が普通で、夏冬においてもほとんど変りがなく、

もし変化がある場合でも二度前後の差があるくらいである。

ところがこの江川湧水池は夏の気温が三十度を越える時、水温が十度以下となり、冬の十二月から一月頃、気温が〇度に近いころには二十二度という高水温を呈し、美しい水蓮の花が咲き、鯉等の魚は活動が盛んになる。

また二月頃から六月にかけて水温が低下し、池では水位が上昇するころには気泡がよく発生する現象が見られる。

こうした全国的にも珍らしい奇現象は学会の注目するところとなり、現在まで江川の異状現象についてはいろいろの方達が研究されていて、この奇現象の原因について種々異なった見解を発表しており、その何れが正しいかは今なお問題として残されているようである。



江 川 水 源 地

その諸説を列記すると

一、吉野川の水が川島から伏流水^{ふくろすい}となって砂礫層^{されきそう}を通り、夏の暖められた温水が半年後の冬になって江川に湧出^{わうしゅつ}するため冬暖かく、反対に冬の冷水が半年後の夏になって湧出するため夏は低水温^{ていすん}となるというもの。

二、地表温度は夏最高であるが、これが地下約五メートルのところに達するには半年かかる。その温められた部分を伏流水が通り、高温水^{こうおんすい}となって冬江川に湧水し、冬の寒冷な地温^{ちおん}が地中に達したところを伏流水が通過して夏、低水温の水が湧出するというもの。

三、吉野川水系と四国山脉から来る他の水系を考え、夏の低水温は千メートルを越える山地から来る水系によると考えるもの。

四、中央構造線や断層等の影響^{えいぎょう}を受けて高温水が湧出していると考えるもの。等がある。

何れの説も継続的観測と四国の地形、地質等から考えられたものであるが、最近この奇現象^{きげんしょう}がその顕著^{けんちやく}さを失ない、僅か^{わず}にその片鱗^{へんりん}を残すような異状現象^{いじょうげんしょう}を起している。

※ 戦前には西端の湧水地では、附近の人々が毎日この清澄^{せいさう}な温水を求めて衣服の洗濯者^{せんたくしや}でにぎわっていたものである。

※ 江川の北西部は吉野川が蛇曲^{だまげ}し、堤防と河道の間には約六〇ヘクタールをこえる砂礫層^{されきそう}の川原が存在し、その南部の堤内^{ていない}の荒廢地の砂礫層を加える時はその面積は約九〇ヘクタールを越える。この巨大な太陽の直射を受ける雑草、作物などによる被覆^{ひふく}なき礫層^{れきそう}が最近の乱掘^{らんくわく}によって減少し、所々に川原の中に人造地^{にぞうち}が形成されている。江川の湧水と麻名用水路への伏流水の湧水には自然現象と人為的工事が好条件となり、異状現象発生に程^{ほど}よい地下水流を創^{つく}っていると思われる。

※ また吉野河口は腕曲^{わんきよく}した川原の礫層^{れきそう}の下方に俗に湯と称する湧水があり、冬二十度に達する高温水となり鮎^{あし}が群をなして集まる場所がある。

思うにこの奇現象^{きげんしょう}は川原の礫層^{れきそう}の表層が熱せられ順次地下へ伝わり、伏流水の流れるところに達して蓄積^{ちくせき}された熱源により地下水が温められて江川に出るものであり、逆に冷却した寒冷な地中を流れて湧水するため低温水となるもので、従来はちやうど六か月の差をもっていたため夏と冬が逆の状態であった。しかし礫層の減少によりその周期が六ヶ月から四、五ヶ月位に短縮され、しかもその奇現象^{きげんしょう}は顕著^{けんちやく}さを失ないつつあるものと考えられる。

ともあれ、鴨島町附近が徳島平野の右岸下流の地下水の涵養^{かんよう}地区と考えられることは興味深いも

のであり、事実ではなからうか。

(立正大学地理学教室、新井、佐倉両先生。石井町篠原先生等の研究紀要から)

旧西尾村役場の碑

中筋の東端にある旧西尾村役場跡は鴨島町の上水道の旧揚水場であり、現在は使用されていないが、そこに左の三基の頌徳碑が建っている。

一、頌徳碑

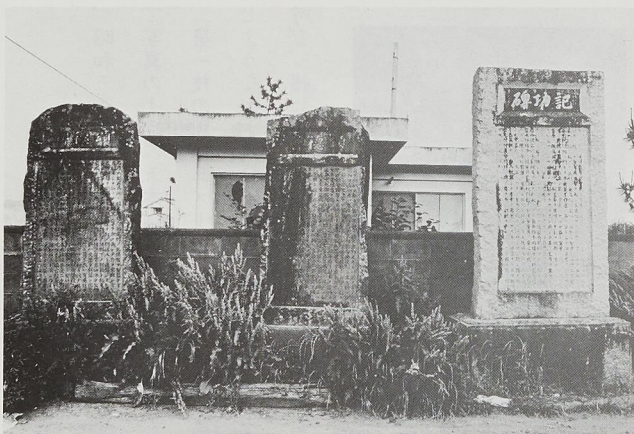
飯尾の石原六郎氏のもので、大正四年西尾村の小学校基金として山林十町歩を寄附した事等を讃えてあり、大正十五年七月の建立である。

二、記功碑

中筋の工藤半平翁のもので、明治三十四年の農会令発布により各郡村に農会が設立されたが、氏が会長となり、その後も村農業発展に多大の功績のあったことを讃えてあり、昭和七年五月の建立である。

三、頌徳碑

江川出身の和田嘉衡氏が貧家に生れながら、独学力行し小学校長となるも、尚東京に遊学、自ら計器を発明し独力で会社を創設、後に三菱の岩崎小弥太氏等と共同で教会社を興しその社長となり、大正七年五千円を西麻植小学校の基金に、同十三年三千五百円を西麻植八幡神社に、更に一千円を村の神社及学校の維持費に寄附したことを讃えてあり、大正十五年七月の建立である。



頌 徳 碑

壇だんの原の五本松

壇だんの原の忠霊塔ちうれいたくのところに大きな黒松があったが、昭和五十六年九月、松喰い虫の被害を受けて遂に切り倒されてしまったが、推定樹令四百年以上で写真のように五本に分れ、地上一米ートルの所で樹周六メートルもあり、この所より五本に分れ、第一枝の周は三メートル三〇センチ、第二、第三の枝の分岐点四メートル六〇センチ、各枝は同じような太さに分岐していて、樹高は三十一メートルもあった木で、西麻植の人はこれを五本松と呼び、横に張り出した根の上は子供達のちょうど良い遊び場で年寄り達の子供の頃の楽しい思い出の場所であって、もう少し長生きさせてやりたかったのに残念でならない。

樹令五百年といわれた県下一古い徳島市の瑞巖ずいがん寺の天狗松てんぐまつも、この松より一年前に虫害で切り倒されたが、今昔の感が深く淋しい限りである。



壇の原老松五本松

第四章 地名

第一節 地名考

呉島郷の郷名

大化の改新（六四六年）によつて国、郡、里の制が制定せられたが、「出雲風土記」によると「靈龜元年（七一五年）、里を改めて郷とせり、其の郷の名の字は、神龜三年の民部省の口宣こうせんを被りて改めぬ」。

とある。すなわち、以前の里（五〇戸からなる）は郷（オオザト）となり、その下に、凡そ三個くらいの里（コザト——以前の村にあたる）が新しく設けられたのである。

平安時代の延長年間（九二三〜九三〇年）源順みなもとのよりが選述した「倭名類聚抄」の国郡の郷名に阿波国四十四郷と二つの余戸が掲げてあり

麻植郡

呉島＝久礼之萬

忌部＝伊無倍

川島＝加波之萬

射立＝伊多知

とある。これによって考えると現在の鴨島町は、その大半が、この呉島郷にあたると思われ、旧鴨島の上下島地区に小字「呉島」の地名が今に残っている。

麻植郡（阿波志抄）

此郡ハ粟ノ日和志ノ命、麻ヲ植始シ所ナレバ、麻植郡ト号セシナリ

呉島||此地西麻植ヨリ麻植塚、牛島、上浦山ヨリヲ云シナリ、根元呉島ト云シハ、昔唐土ヨリ呉部、漢部ナト云綾羅織縫人ヲ召ヨセ、攝州呉服又池田坏ニ置、其後諸国大社ニ二人宛付玉フ、阿波大社三社唐人六人、今云上下島ノ辺ニ飯尾村ニ唐人ト云所アリ此ニ住ス、今ニ末葉トヲホシキ人アリ、又上下島ハ呉島ノヨミ誤ナリ。

町名 鴨島について

この町が何故「かもしま」と呼ばれるようになったかを考えてみると、わが国へ応神天皇の頃以來中国大陆や朝鮮から多くの帰化人が移住しているが、大和の国の呉原、攝津の国の呉服と同様に、阿波国の呉島は大陸帰化人の土着した所で倭名抄に見える呉島郷こそは本町の故名で大体現在の鴨

島町内の地域であったと思われる。

それが中世に入って麻植保となり、その西の方の地区にあるから西麻植と名づけられたのである。

鴨島地区の「鴨島」という名は、旧町の東北にある神島のかみがかもに変わったという説があるが、室町時代の文安五年の文書に「掃部島」の文字が見えるから「かもんじま」が「かもじま」と呼ばれるようになって「鴨島」の字が使われるようになったと考察されともいわれる。と町誌にもあるが県内にも阿南市の加茂谷、徳島市の加茂名、三好郡の三加茂町加茂がある。

三好郡の加茂は京都の加茂神社の社領であったので加茂と名づけられた古文書が京都の加茂神社に残っているから其のいわれは明白であるが、他はどうして「かも」と名がつけられたのであるのか。また京都の加茂神社の加茂という語源は何であろうか、河に面しているからの河面か、鳥の鴨が沢山居る所だからか、地形的にいつでも皆な河に面している所なので河面でも鴨でもあてはまるが、あるいはまた神の音の転化即ち神社があった所という意から生れたのであろうか、果してどれがほんとうであろうか。

西麻植の地名考

西麻植Ⅱ平安時代すでに現鴨島町一帯は麻植保という荘園があつたが、源頼朝が鎌倉幕府を鎌倉の地に開いて、諸国に守護、地頭を設けて武家政治を始め、ここの麻植保の保司に平康頼を任じたことが史実とされている。

麻植保は現鴨島町一切を含めた全域といわれているが、ここはその西端にあたるので西麻植と名づけられたのであろう。

それでは麻植がどうして郡名や村名になったのであろうか。

古語拾遺に「仍令天富命率日鷲命孫求肥饒地遣阿波国殖穀麻種其裔今在彼国」云々とあり、忌部氏が麻を殖産したからとの右のような文書から麻植と名づけられたといわれ、それが通説になつていたが、最近麻等作物としては後進性のものから地名が生れる筈がないと大分異論が出ている。

即ちこの土地が二千年前は海がこの辺りまで入り込み、大きな江（国語大辞典では「江」とは元来川、海、湖、堀等の一般的な呼称であるが、特に陸に入り込んだ部分をさすことが多い）であ

つたのであるので、やはり当時の海が入り込んでいた状態、即ち「大江」に対する、当て字「麻植」にした地名とも考えられる。

尚旧村名西尾村は西麻植の西と飯尾の尾をとって名づけられたのであろう。

西開Ⅱ開とは農地を切り開くこと、即ち開墾することです。平均して地味が悪く人間が住みついてから後に新しく開墾した所であり、この地名は全国的な地名で、ここも河川ぞいで新しく開墾された所である。

大東Ⅱ西麻植地区の東の方にあるということから名付けられたのであろう。

中筋Ⅱ中央地区の意で名付けられたのであろう。

絵馬堂Ⅱいい伝えとして昔中内神社の社地が現在の何十倍もあつた時の絵馬堂があつた所であるといわれているが、余りにも距離が現在の神社から離れているので、さでどうであらうか。

田淵Ⅱ田の反転語であらうか、ここは山麓地帯で、しかも深田で年中池のように水が溜まっているし、上古は吉野川の流路であつたので、それに対して名付けられたのであろう。

壇ノ原Ⅱここも古代の訓練場跡であるとの伝説があるが、東禅寺山までの広域地名なので、壇状になつた台地に対して名付けられた地名であらう。

東禪寺トウゼンジは昔東禪寺という寺があつたので、この寺のある所であるので名付けられたのであらう。

新田ニナタは地名学上新しく開かれた土地ということであるが、吉野川の堤防が無かつた時は、ここ新田地区は吉野川の出水ごとにまず一番に直撃され、またその上に湯吸谷ユサダの鉄砲水の被害をおもつた地区で、急流に作物がやられ、農地までも水に掘り起されたりしたので、開墾カイコンがなされた土地の故に名付けられたのであらう。

麻植市マウヅはここは伝承として市が開かれていたからこんな名がついたといわれているが、果して麻や穀物の市が開かれていた土地であらうか。何時の時代に名付けられたかは不明で、市が開かれていたことを証明するものは無い。

青柳アヲヤナギは川添いの青柳の一ぱい生え繁つていた土地という意で名付けられたのであらう。

青柳添アヲヤナギは右にそつた所という意であらう。

前須賀マエスガは洲処サトで砂洲地の所という意で、大体川添地であるが、元河床であつた所にも名付けられている。吉野川沿岸には何十個所もある地名である。

第五章 民話・伝説

第一節 民話

狸に化かされた話

大正の頃までは用水縁の所々に竹藪があつて、夜は淋しい場所が至る所にあつたので狸にまつわる話が非常に多い。

昨夜、誰れさんは、大入道が出て来て腰が抜けて目を廻わし、



朝が来てようやく気がついたとか目のさめるような美人が出て来て、誘われてご殿のような立派な家へ行つてごちそうになり風呂に入つた所が、あくる日の朝になり気が付いたら野壺でもがいてい

たとか、婚礼から帰りに折詰をさげていたのに、いつの間にかだまされて取られたとか、

道に迷つて何十回も同じ所を廻り廻っていたとか、相撲取と会つたので相撲を取るところを面白うてしようがないので、つい朝まで桑の木と一生懸命相撲を取っていると面白がけの人が見つけて声をかけられ、はじめて気がついた。とか言うような面白い話で持ち



切りであった。そんな呑気な時代の方が今のあわただしい時代よりも良かったような気がする。

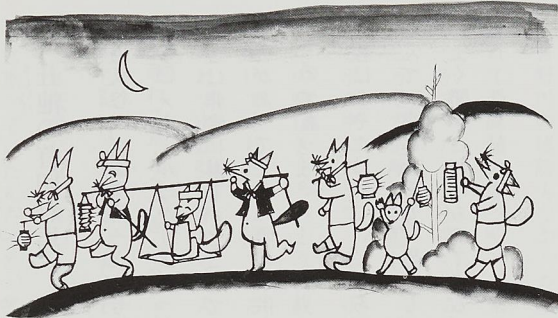
狸が汽車に化けて轢き殺された話

徳島と川島に初めて鉄道が敷かれた頃、狸が度々轢き殺されていたそうであるが、これは狸が、夜、汽車に化けて走っているうちに、本物の機関車にはねられて死んだと言うことである。

当時の機関士の話を聞くと夜間、西麻植駅から川島駅に向かって走っていると川島の方から汽車が来るので急停車すると何もない!!ハハーア狸のいたずらだったかと気づき発車したが、明晩も同じような状態で向こうから汽車が走って来るので、狸のいたずらなどそのまま発車すると、あくる日の一番列車の機関士が狸の死骸をレールの上で発見したそうで、それがたびたびであったとか、これはホント・ホントの話。



狐の嫁入りの話



大正の頃の話であるが、当時は、まだまだ狐や狸が、美女や大入道に化けたのを見たとか、狸にばかされたとかの話が毎日のように人々の話題になるような時代であった。

ある時は吉野川の堤防の上や南の山の麓を何十もの提灯が並んで動いていた。これを入々は狐の嫁入りだと言っていたが、「よんべわたしも見たんでよ。ほんでそれが半時間も続いたんでよ。」とまことしやかに話し会ったをたびたび聞かされた。また宴会やお客からの帰り道に再々折詰をだまし取られたとか、その他いろいろな化かされかたをした話を人々はほんどのように思い、また言う人もほんどのように言ったのであるが、現在の明るい夜道とは比較にならない田舎の細道の真暗やみて狸も狐も今にも出そうな状態であったことが、こんな話が出る原因になったのであろうか。

丑池の首切れ馬

湯吸谷川が国道第一九二号線と交差するところにある茶屋橋から奥へ二〇〇メートルばかり上がったところに昔、丑池という池があり、そこは非常に淋しいところであつたが、大正の頃までは恐ろしい言い伝えがあつて、その頃の子供たちはよくお爺さんやお婆さんに聞かされたものであつた。



「昔はあそこは淋しいところで、夜になると首切れ馬が、その残った首に鈴をつけて谷を走りまわるんで、夜になると、恐ろしがって誰もあの辺りには近づかなんだんでよ!!」
とよく聞かされたものである。

六地藏さんの話

昔々の話、西麻植の今の小学校のあたりが、まだまだ低い土地であつて柳が生茂り年中小川のよ

うに水がビショビショと流れて川原のような状態であつた時に、大雨が降りそれがあがつたので、子供たちは七、八人でその川原のようなどころで遊んでいた。

吉野川の堤防もなかつた頃の話であるが、吉野川の上流、土佐の奥地で大雨が降りその水が一日遅れて西麻植の方へやつて来る。子供たちは一番恐ろしい「鉄砲水」だということを知つて方々木につかまったり、小高いところに避難するなどしても時には間に合はず尊い生命を失う時もあった。こうした危険な状態になつたとききまつて見知らぬ六人の人が南から舟にのつて来てはかわるがわる水の中に入つて、その子供たちを救つて家々に届けては南の方へ去つて行つた。

その時はきまつたように親たちは気がボーツとなつてただ見ているばかりであつた。気がついて今助けてくれたのは誰であるかと聞いても誰もわからなかつた。

それで水が引いてから六人が去つた方へさしに行つて見たがわからない、それで十力寺の坊さんに尋ねて見ようと寺へ入つて尋ねると、坊さんがいうには、私がさつき庭へ出て見ると、六地藏さんがどこに行かれたか、おられなんだ、今見ると座つてござらっしゃるので良く見ると、「今日は今朝から天気になつているのに体や、よだれ掛けが水でジヨボ濡れになつているが、どうしたんだらうと思つていたんだ」と、答えたが、結局その六地藏さんが人間に化けて子供たちを助けてくれた

んだらう、ということになって附近の人たちが、さっそくお礼参りをして、新しい赤い「ヨダレ掛」を作ってさしあげたそうである。



第二節 伝 説

忌部の伝説

この地忌部に関する伝説は頗る多い、史実解明ならされども参考として茲に掲ぐ。

壇の原と称せる地あり、東西三十間南北四十間計り平地あり、附近に古松あり忌部松と称す、字西の宮山上天日驚命御陵ありと伝う先年村人開拓せしに、原史時代宮造せし古墳にして鉄器、土器等を発掘せり、式社略考に曰く西麻植村に小字廣堂（現在広畑）と称せる地あり、往昔は堂と云い西隣（西隣村のこと）に神後あり、東（西の間違いか）に接して、絵馬堂と云う地あり、上古広堂附近に忌部神社ありけるが、洪水に流失し、其後兵乱打続きし故再建に至らずと云へり。

又、中内神社は其当時流失せし忌部神社を仮に祭祀せしなり、とも云う。其他地名に馬場、的場、御供田、巫塚、土器メン、麻植市等あり、又四基の立石と称せるあり、一基は神後、二軒茶屋、一基は山田村、一基は敷地村、一基は西麻植村田洲にあり、而して安房忌部の祖太玉命を祭祀せる官

幣大社安房神社は安房国（千葉県）安房郡神戸村にあり、此地字敷地村（上古式地）小字に神戸ありて、忌部の大社ありしならんとの口碑を伝う。

右は久保忠男さんが大正六年に著した麻植郡郷土誌をそのまま転載したものであるが、当時としてはそういう伝説がみんなの間に信じられていたことは事実であり、検討する必要があると思われる。

観音堂のはなし

大正の十年頃までは二抱えもある太いしだれ桜の太木が、息もたえだえに生残りの一枝に精一杯の力をふりしほって花を咲かせていたのを、古老の方は覚えておられると思うが、その桜の木にあった所を昔から観音堂跡と呼んでいた。そこは東禅寺の梯子さんの東側の畑で、明治の頃までは耕作もせず原野であり、桜の木の側に井戸もあったが、その井戸も昭和の初め頃埋められて桜の株



しだれ桜（明治32年写）

も跡形もなく、畑地となっている。

ここが東禅寺の跡地ともいわれているが、やはり東禅寺は十力寺の所にあったのであろう。またここにあった観音堂も、長曽我部に焼かれたという話も残っているが、果してそうであらうか。

善行者与兵衛父子の事

この話は、阿淡孝子伝という昔の本に記載されていたのを久保忠男著・麻植郡郷土誌（大正六年著）に載せてあったものを現代語に訳したものである。

与兵衛は西麻植村の人で、その子と与右衛門といい、家族みんなが仲よく暮していたが、与右衛門は父の心を以て自分の心として、その行為は慎しき深く立派で、父に劣る事がなかった。

父子共に実直で義を好み財をおします、また苦勞もいとわず共に家業に精を出していた。また儉約を旨としてむだなことはしなかった。先年洪水の時村中が田地を流したり、収穫を皆無にしたり、貯蔵してあった米麦等を流してしまった人たちのために自分の蔵を開いて穀類を放出して餓えた人々を救い、農具等を流した人々には農具を貸し与え、また種子を恵んだり、衣類を流した人々には衣

類を買い与え、その救済を受けた人たちは数知れない。喜びも悲しみも附近の人たちと共に味わうような行いをし、またこんな事を他村の人たちにも及ぼしたのである。それを聞いた藩主はその行為を讃えて何か欲しい物があればやるからと云われても固辞して受けなかった。

享和元年（一八〇一年）の秋大洪水があつたが、その時も舟を出して流れる人や牛馬を救つたり、穀類や衣類を与える等して助け、又家を流した者には柱や竹を与えて家を建てさせたりしたのでまたまた藩主から奇特なる事と賞讃せられ謁見を許され、帯刀を許すようにいわれたが、これも固辞して、百姓のままに据置かれた。又与兵衛の弟、久助も附近に別家していたが兄のように友愛深く温かな性格であつたので皆の者から兄や甥のように誉められた。

与兵衛の後裔、鴻野房太郎氏現に川島警察署に奉職し、児島村で駐在している。久助後裔の鴻野雄五郎氏は西麻植に現住すると記されている。

赤子屋

絵馬堂のある所に「赤子屋」という言い伝えの土地があるが、そこには昔小さな小屋があつて捨

て子をそこへ捨てた所であつたといわれている。そして夜な夜な赤児の泣き声が出たと言ひ伝えられている。

今は麻名用水を掘つた時の揚げ土で埋つてしまつてゐるが、その前は現在の道路より三メートルも低かつたそうなので恐らく吉野川が氾濫することによりここへ水が舞い込んで、墮胎が常習であつた藩政時代に吉野川の川原に捨てられたり、川原に仮埋葬された胎児がこの低地へ水の流れに乗つて舞い込んだり、犬の死骸が流れて来た所なので、そんないい伝えが残つたのであろう。

洪水の時のひろい話

一、或る人が吉野川の秋の大洪水に小さい草屋の家が流れ、自分もその上に乗つて流れていたところ、その草屋がひっくりかえつて自分も水の中に投げ出された。さいわいに近くに生えている大木に流れつくことができ、上へ登つて行つたところ、沢山の蛇がその木の枝にまきついていたが、しばらくするとその人の身体に次第に寄つて来て、着ている着物の中へはいり込んで来た。相手は青大将だから嘔みはしないので、気味が悪いがそのままにしていると十匹位も身体にまきつい